

# 山と博物館

第43巻 第6号 1998年6月25日

大町山岳博物館

特集 「日本山岳画協会展」7/18~8/30

## 日本山岳画協会展開催にあたつて

日本山岳画協会

日本山岳画協会は好んで山を描く画家の集団として、それぞれの道に精進していく人々を横に連ねて、互いに親しみを増し、作画にも、発表にも便宜を加え、鑑賞や研鑽の機会を多くしようという目的で発足いたしました。

足立源一郎、中村清太郎、石井鶴三、茨木猪之吉等を創立会員として発足以来、本年で六十二年になりました。

題材は狭く山岳と絞らず、山麓も、山に生きる動植物、山にちなみむ民話伝説、天象、人の生活まで広く題材を求めています。

当会は、東京において毎年定例展を、一九八四年以来ほぼ五年ごとに大町山岳博物館で特別展を開催しております。今年も同館のご厚意で特別展を開催する運びとなりました。ご来館の皆様にご高覧いただけますことを、大変幸せに存じ上げます。



ニルギリ北峰（ネパール） 藤江幾太郎

## 大槍小槍

上田 太郎

しかし同行のM君が、「小屋はおもしろくない。テントにしよう」とのこと。整地してテントを張る。なんと横尾にテントは我がチ

槍ヶ岳山荘での山岳画教室は三年続きた。風に見舞われている。雨中登ってきたK君、M君共早々に下山。その日は終日雨の予報。だが何故か外れ。午前十時、空が明るくなり

陽がこぼれる。彼らを帰すのじゃあなかった。が、後の祭りである。晴れるかも。そんな期待が実現した。描けるネ。描けますネ。関戸氏と顔見合せニンマリ。西鎌尾根を千丈乗越へ。振り返ると大槍小槍が、わずかなガスの中で薄陽を受けていた。九月末の紅葉し始めた四圍の沢々にガスが走る。その時突然、鳥の声を耳にした。関戸氏も聞いたという。もう「ケツコー」と。大槍小槍の絵はこうして生まれたのである。

## 冬姿槍ヶ岳を描く

江村 真一



冬姿槍ヶ岳 江村 真一

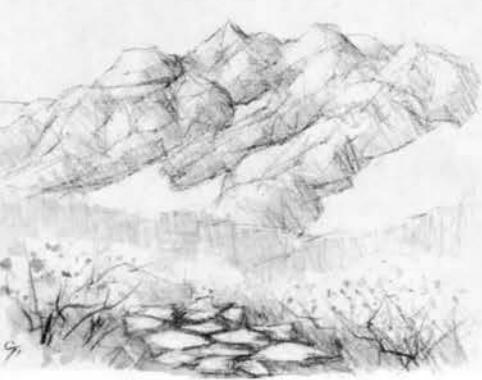


たそがれのマッターホルン 牧 潤一

## たそがれのマッターホルン 牧 潤一

一瞬の秋

後藤 三男



奥穂高岳 (涸沢カール) コンテ 後藤三男

十二月、冬の槍ヶ岳が描きたくなつた。安房トンネル開通にともない、移転新築した中の湯が仮オーブンしていると聞き、さつそく第一日目をゆつくり湯につかることにする。新中の湯は、以前の谷間の湯場と違います。美しいながめだつた。夕日に照らされ輝く奥穂から前穂の稜線は、高く優雅にそびえていた。

翌日、夏の喧騒がうそのような上高地、河童橋を横目に横尾まで雪もなく、天気も良く快適に進む。あまりの好条件に、明日からのことだが、かえつて心配になる。横尾の避難小屋をのぞくと、静かに二人がストーブにあたつていて、どうぞどうぞと招いてくれた。

夜半から雪が降り出し、除雪の為、三時起きるはめになる。五時頃起きて外の様子を見るが、降雪しきり、停滞と決めこみ、又寝待が実現した。描けるネ。描けますネ。関戸氏と顔見合せニンマリ。西鎌尾根を千丈乗越へ。振り返ると大槍小槍が、わずかなガスの中で薄陽を受けていた。九月末の紅葉し始めた四围の沢々にガスが走る。その時突然、鳥の声を耳にした。関戸氏も聞いたという。もう「ケツコー」と。大槍小槍の絵はこうして生まれたのである。

M君と乾杯！

薄日がさし一部青空も見える。少々遅いが出发を決める。ルートは降雪のため、わずかに判明できる程度、膝から股ぐらいのラッセルが続く。途中からM君に先頭をゆずる。歩みは遅々たるもの、森林限界へ二時半到着。稜線は、風に飛ばされて、雪はほとんど無い。槍や穗高が午後の斜光に照らされて、陰影に富み、最高の山の表情を見せてくれた。あまりゆつくりできず残念だったが、冬山の写生行としては、十分楽しむことができた。

上部に「こよいの月夜明らけくこそ…」を思われる豊旗雲がひろがっているので、画題を「豊旗雲のマッターホルン」としようかとも思っている。

その他バノラマより二時間位後の光を受けた「朝のリスカム」三〇号。昨秋取材のホテルエヴェレスト・ヴューから見た、「朝のクーンブ山群」も出品予定。右端にアマダブラム、左端にタウツェまで、横長の百号にうまく構図を納めようと、日下悪戦苦闘中である。

私達の生活圏に秋の気配を感じはじめるころ、ここ本谷橋を渡つて夏道をたどり、涸沢

のあたりまで来るあたりまで来る

と既に三段紅葉、ホツとして吹き出す汗を拭いて休息。見頃の季節は平年で一〇月初旬。穂高連峰の山塊と涸沢カールの斜面を彩る真紅のナカマド、黄色のダケカンバ、緑のハイマツの

コントラストは

瞳の風景である。

目にするこの感動を声に出したりすれば吹き飛んでしまうような怖さを覚える。

じっくりと見つめて心の奥底に秘めるような思いを込めて、コンテでスケッチブックに描き込み水彩で着彩、乾きを待つて退色した色調に意図半ばを感じながら涸沢の雄大な自然の造形から受けた感動を大切に、イメージをふくらませて描き込み、コンテ、水彩で補つて完成。

数日この辺で描いているうちに目をみはるような光景も過ぎれば一瞬で、木枯らし、一番雪の訪れとともに沈黙の冬景色へと移つて行く。

### ツクチエの祭り（ニルギリ山）

熊谷 横

おととしの秋、西ネバールのツクチエ村を行ったときスケッチした。「新雪のきたヤク・カルカ」と「ダウラギリと二匹のボニー」は、祭りの前日ツクチエの裏山にボニーで登ったときスケッチしたものだ。馬方の少年に連れられて千メートルの高度差の急坂を登ったのはいいが、下りは馬をおりて歩きなのでかなり膝が痛くなる。ヤクが放牧されている三千五百メートルの稜線にはもう新雪が来ていた。

ツクチエの祭り（ニルギリ山）  
熊谷 横  
星空のツクチエビール 熊谷 横  
聖なる河、ガンジスの源流の一つである、ガンゴトリ氷河の向こうに見える白い峰、垂直の壁は乳白色に輝く、三峰あるが近づくと一峰は見えなくなる。

### 籠川谷の啓示

平沢 利夫

登山口あたりには山の神という地名や石の祠がある。山の神の領域と、人の住む里との境界とを示す結界だと言う。

五月の中旬頃だった。針ノ木岳帰り写生に出掛けたが、大沢小屋を過ぎるあたりで雨となり、峰近くでは雪になつた。針ノ木の避難小屋に逃げ込んでガスの切れ間を待ち、それでも船窪岳と七倉岳が描けた。

話声も通らない吹雪に変わった中を山仲間と、ひたすら大雪渓を下る。土捨て場あたりでようやく風と雨から開放され、車で長野にむかつた。鯉のぼりや、水の張られた五月の田に、人の住む世界に帰れたのを実感し、しか思えなかつた。

持つて踊る坊さんも何かわざがあるらしい。虎の皮の腰巻きをつけた鬼の面の人も出てきて、鹿や猿の面をつけて踊る人もいる。

左上の空に飛んでいるのは道化で、寺の中庭をあちこち駆け回つて見物人の帽子やお弁当を取りあげたりおどけてみせる。これが一度に現れるわけではなく、まず寺の屋上で朝アルペンホルンのような吹奏で祭りがはじまり、次から次へとカネとタイコの音楽に合わせて出し物があり、遠く近くから集まつた村人が夕方まで楽しんでいた。

「新雪のきたヤク・カルカ」と「ダウラギリと二匹のボニー」は、祭りの前日ツクチエの裏山にボニーで登ったときスケッチしたものだ。馬方の少年に連れられて千メートルの高度差の急坂を登ったのはいいが、下りは馬をおりて歩きなのでかなり膝が痛くなる。ヤクが放牧されている三千五百メートルの稜線にはもう新雪が来ていた。

### 穂高、ヒマラヤそして穂高

増田 欣子

穂高涸沢は私にとって大きなアトリエ。

やがて海外の山へと足をのばしていった。

○氷雪のアマ・ダブラン（ネバール）

エベレスト街道の途中にあるシャンボチエの丘、そこに日本の登山家宮原巍さんが建てたホテルエベレストビューアーがある。

こから世界の最高峰エベレストを望むことが出来る。しかし、何と言つても美しいのは、右手前方に聳えるアマ・ダブラン（母の首飾り）（六八一m）、その山容は人の心を引きつける。

○ガンゴトリ氷河からのバギラティ（インド）  
聖なる河、ガンジスの源流の一つである、ガンゴトリ氷河の向こうに見える白い峰、垂直の壁は乳白色に輝く、三峰あるが近づくと一峰は見えなくなる。

### 聖山カイラス（チベット）

チベット高原の西に、仏教、ヒンドゥー教、ボン教等の聖山カイラス（六六五六m）がある。この山を一周するコルラ、五二キロを信仰心の篤い人々は五体投地で回る。最高地点ドルマ峰は五千六百メートル。白いヘルメット型の奇妙な山カイラスは遠か彼方からも目立ち、そのたたずまいには神秘性が感じられる。

ヒマラヤやチベットから帰つたら、私は穂高に想う。異国の旅の疲れは、父なる穂高、そして母なる涸沢で癒すことが出来る。



ガンゴトリ氷河からバギラティ峰 増田 欣子

龍川谷でもう一つ、非日常的な感慨に巻き込まれた。大沢小屋で前泊し、翌日蓮華岳まで描きに行こうと夜の九時に川沿いの林道を歩きはじめたが、川原から小屋への小径がどうしても見つからない。九月の小雨の谷間は鼻をつままれても判らない程の真の間。二時間近く川原を上下した結果敗退したのだが、夜気には物ノ怪や魑魅魍魎がじっとこっちをうかがっているような気配が満ちていて、久しく忘れていた闇の怖さと凄さが迫ってきました。

山は造物主が思い上がった人間たちに一生物としての原点再考を促す、聖なる場でもあります。



針ノ木岳 平沢 利夫

## 花咲くウルタル山麓 岩切 岑泰

るような気がしている。



花咲くウルタル山麓 岩切 岑泰

『不老長生の秘境』・シャングリラとして名高いカリマバードの村落を訪れるのは、三度目であった。この村の顔であるウルタルII峰（七三八八M）は、V字形に広がる巨大な岩稜の隙間に聳え立つ。初めての出会いは八七年ほんの一瞬であった。しかし、それだけに印象深いものがあり、忘れることが出来ない山の一つになつた。二度目は、前年の九一年に天才登山家・長谷川恒夫がその山で遭難死したこともあり、再度見てみたいと思つた。

ブにしたポスターが貼つてあり、思いもかけない出会いに驚かされた。三度目の正直と言おうか、今回はじっくり対面することが出来た。

その朝は、まだ暗いうちに見晴らしのよい丘に登つて日の出を待つた。黎明の空にその秀麗な姿がピンクに頬染め光り輝き始めた時、未だ手元は暗かつた。夢中でエンピツを動かし色をつけ一息ついた時、フンザの深い谷はすっかり明るくなつていて。岩棚に立つ宮殿が朝日を受けて白く輝き、谷全体を埋め尽くすアンズや桃の花々も、次々と美しく輝きはじめた。正にシャングリラの眺めであった。

## 山毛櫛の芽吹く頃 山毛櫛 ふな

松原 修司

上越線小出・浦佐付近の車窓からみる越後三山（駒ヶ岳、中之岳、八海山）が水田に投影し、鯉のぼりが泳ぐ田植の頃が好きである。長かった冬も終わり残雪期の越後の山々が一

番輝くときであり制作にかかりたてられる。

五月上旬、除雪も終わり冬期間閉鎖されていた交通止めの解除されるのをまつて、でかける。白銀

（98・5・5只見水系北之岐川石抱にて）

## 信州と私の山の絵 若林 晴男

いま私の家の窓から北アルプスの一部が見える。昨年仕事の第一線から退いたのを機に横浜から信州に移り住んだのである。月並みな表現ではあるが、山紫水明、四季折々の風光に魅せられて以前から何度もこの地に足を運んでいたのであった。

流の学習院大学のヒ

ュッテ付近は、まだ開発されず自然があり静寂そのものであり絶好のモチーフである。

駒ヶ岳から檜廊下、中之岳更に兔岳への縦走尾根、荒沢岳の岩稜はアルペン的で圧巻である。



八海山 六日町にて 松原 修司



山村雪景(新行) 晴男

「山村雪景(新行)」と「白馬岳春景」はどちらも拙宅のある美麻村内の取材だ。なんと言つても描く対象が身近にあるというこの心強さを沁々感じたことであった。これからも未熟な筆に自然の移ろいを写して絵の道に精進して行こうと思つてゐる。

十余余年、その間描いて回つた信州と周辺の山岳風景。然し近年に至るまで高速道路や新幹線が未整備の為往復に手間取り、何時も限られた時間内での制作を余儀なくされ、毎々未完成の作品を抱えて帰る無念の繰り返しであった。

本展の「乗鞍晚秋」はそうした思いを長いこと引きずつていた作品で、仕上がるまでに優に五年以上の歳月を要した。家内はその思い込みの割には見栄えがしないと手厳しいことを言うが、やつと自らに課した宿題の一つを成し遂げた様な気持ちである。

## マツターホルン北壁

武井 清



マツターホルン北壁 武井 清

山登りはつらければつらいほど、苦しければ苦しいほど、それを乗り越えて頂きに立つた時、何ものにもかえがたい素晴らしい感動を与えてくれる。この感動を絵に伝えたいと思はじめてすでに久しい。先はまだまだ遠い気がしてならない。何れにせよ地道な努力を続けていくしかないと思う。

## 刻(三俣蓮華岳丸山)

高橋 てる子

北アルプス三俣蓮華岳より、双六岳への稜線を気持ちよく歩いていると、槍ヶ岳を背に白く光っている地面がある。近づいてみるとハイマツの白骨化した枯れ木が、一面に不気味に散らばっていた。

ハイマツの墓場である。

どうしてここだけに、それも槍ヶ岳に見守られていることは、神様が北アルプス中のハイマツの枯れ木を集めた気がした。

青々と葉を茂らされて、地をはつていた時は、かわいい雷鳥のお宿にも楽しい日々があつたでしょうに。

それが、もがき苦しんできたように重なり合つてゐるのです。

凄絶な自然のいとなみを見た気がした。

私は人間のいとなみと同じものを見たようじながら描いた。

からホワイトアウトのため、先が全く見えなくなり、運良くブクタの無人小屋が見つかった時はすでに暗くなりかけ、まさにダウン寸前、九死に一生の思いだった。翌朝最後の難関と言つてゐるヴァルベリースのコルに向かう。疲労困憊の末にコルに辿りつき、念願の北壁の威容を目の前にした町、感激のあまり涙がとめどなくあふれ出たことを思い出

## 梅池高原雪景

沢 松樹



三俣蓮華丸山 高橋 てる子

梅池高原の五月、水芭蕉の咲く前はまだ一面の雪だ。訪れる人の少ない高原は静寂の中であった。この広い高原にいるのは自分一人、ほかにだれも居ない自然の中で制作出来るのはうれしいことである。

この雪の下で水芭蕉が春を待つてゐる。やがてこの雪が解け、白く清楚な花弁を見せるようになると多くの人がつめかけてくる。

その前にこの静かで大きな高原を独り占めしているのはまさにリッヂな気分だ。この日は風もなく、人もいなくて素敵な制作日和であつた。

生ま故郷の裏丹沢。そこでは暮しの為に、一年中薪拾いに追われ、堆肥用の草刈りに連日山に通つた。足元の蝮におどかされ、蜂に追われながら。山里的生活はこの山の地力に支えられている。しかし、山は温かく包んでばかりはいてくれない。吹きだまりの雪にはまり、死に損なつた冬の薪拾い。親戚のおじさんや、大好きだった近所のおじさんの命を冬の丹沢は奪つてしまつた。

### されど丹沢山

関戸 紹作

「山の絵」というと高い山を描きたいは人情であろう。学生時代（戦時中）から高山に憧れることになつた。宿泊代の米を背負つて。しかし、絵を見ると唯の形の描き写しの感だけが残つてゐる。再度その山に登ると「やあ、また来ましたね。」と客として迎えているだけの感である。富士山にも何年か通つてゐる。しかしながら、私の土の匂いがしみこままで、私を客扱いの感である。

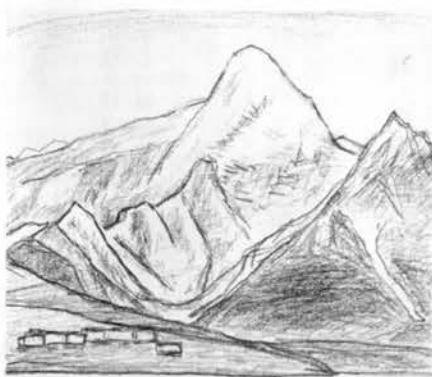


沢 松樹 梅池高原雪景

そうした結びつきが、丹沢山を大きく、温かく、また厳しい自然の姿として、私の心を包んでゐる。そこには、土や草木の香りを覚える心の安らぎの山として。また、私を一族のひとりとして掌に乗せてくれる頼もしい魔神のそのように。膝を折つて筆を握る。



裏丹沢 関戸 紹作



ニルギリ北峰（ネパール） 藤江幾太郎

## ニルギリ北峰（ネパール） 藤江幾太郎

山旅素描

今回出品の主作品は、ネパール奥地、ジョムソムの風景である。その場所は、最近特に開けた所で、ジョムソムの飛行場の近くに、新しい宿が沢山建設された。その内の一軒の宿に五泊して作品を描いた。

この作品は、八〇号であるが毎日部屋から二階から、ニルギリ北峰がよく見えるのでこの宿に五泊して作品を描いた。

よく見えた。この宿の階段が急で、昇降が辛いので居室で暮していた。二階の部屋は、ベットが二個中央にあり、窓側が写生の場所、隣にトイレ洗面所があった。食事は三食、階下から運んでくれた。

毎日来るはずのボカラからの空路が休みになり困つた。宿に頼んで、臨時に出る五人乗りヘリコプターを使って、ジョムソムを脱出した。外人三人と相乗り、当方二人だけ五人乗りのヘリでボカラへ脱出した。もちろんかなり高くついたがやむを得なかつた。

第42巻第7号（平成9年7月）  
大糸沿線スケッチポイント案内  
牧潤一先生、江村真一先生より絵画寄贈の  
お知らせ

第39巻第12号（平成6年12月）  
牧潤一先生、江村真一先生より絵画寄贈の  
お知らせ

日本山岳画協会

第34巻第7号（平成元年7月）  
日本山岳画協会  
藤江幾太郎

足立真一郎

バックナンバーのお知らせ  
日本山岳画協会、または会員の方々に關する「山と博物館」のバックナンバーがあります。卷号は次のとおりです。内容につきましては主なもの紹介ですが、どうぞ了承下さい。

山と博物館 第43巻第6号  
発行 〒400-0001 長野県大町市大字大町八〇五六一  
大町山岳博物館  
印刷 大糸タームス印刷部  
定価 年額 一、五〇〇円 送料共（切手不可）  
郵便振替口座番号〇〇五四〇一七一九九八

### お知らせ

「動物写生画展」と題し、五月に行われた写生画参加者の作品を山岳博物館講堂において展示します。期間は七月五日（日）から八月三〇日（日）までです。入場は無料です。

右記にご希望のものがありましたら、一部一〇〇円でおわけします。卷号と部数を明記の上、現金書留か口座振替で大町山岳博物館宛て送金ください。（送料当方負担）

山と博物館 第43巻第6号